

二〇二二年四月二三日

コップ酒目刺しの苦み丸かじり  
業平の墓所燭のごと松の芯  
嬰兒の動画に飽かず温かし  
犬駆けし狼藉と見しクローバー  
大路いま絨毯のごと桜蕊  
山笑ふ牛のひと鳴き草千里  
目借時同じ頁を行き戻り  
木の芽風古墳の丘に満てりけり  
学び舎を囲むフェンスに躑躅燃ゆ  
せめぎあひ大口あくる燕の子

凡士 凡士 凡士 凡士 凡士  
なつき はく子 邑 凡士 凡士  
あひる 豊実 満天 満天  
みきお 智恵子 凡士 豊実

二〇二二年四月二二日

トロ箱に青点滅す螢鳥賊  
エリカ咲く天主堂への磴険し  
鯉幟川面に影の泳ぎけり  
若葉風いたずらカラス鳴きにけり  
帽子脱ぎ挨拶返す新入生  
老犬の歩幅に合はせ野に遊ぶ  
路を剥く指に緑の香を残し

智恵子 凡士 豊実 凡士 凡士  
こすもす せいじ むべ たか子

二〇二二年四月二一日

雑木山まだら模様にあひけり  
水匂ふ尾瀬の木道水芭蕉  
ふくしまの桜咲く浜聖火ゆく  
アパートの窓に向き合ふ鯉のぼり  
穴出でて蟻の見上ぐる壺中天

明日香 宏虎 凡士 せいじ たか子  
あひる みきお

二〇二二年四月二〇日

響かせて特急通過山笑ふ  
四肢伸ばし目ン玉浮かぶ蛙かな  
春日燦猫弓なりに大あくび  
春耕の田を我がものに群れ雀

あひる みきお 宏虎 満天

溪谷の漣の紫藤の花

素秀

大寺の楼門反りて夏近し  
ベビーカー止まれば泣く児風薫る  
霞立つ散居の村のいよよ寂ぶ  
戯れているかと見れば恋雀  
島出でず娘と孫と海女三代

もとこ なたき たか子 あひる 凡士

二〇二二年四月一九日

単線の対向車待つ目借り時  
弱小部全員レギュラー風光る  
若鮎の銀鱗混じる堰しぶき  
春蝉のかそけき声や山の風  
小手毬の日向を虻の忙しく  
玉垣の参道染めて山躑躅

たか子 むべ 素秀 素秀 凡士 ぼんこ

二〇二二年四月一八日

春霖に弦を緩めぬバイオリン  
蒼天の深さ知りけり揚雲雀  
浦風に突つ込んでゆくつばくらめ  
春潮へ稚魚放つ手の青臭き

むべ みきお たか子 やよい

二〇二二年四月一七日

集合は藤棚の下歩こう会  
菖蒲園傘傾けてすれ違ふ  
延々と翠黛のびて夏近し  
春宵の北野艶めくモスクの灯  
のどけしやポンポン船の水脈の波  
断捨離に費やすひと日木の芽雨  
降り出しの雨の匂ひや杜若

和子 みきお ぼんこ 凡士 ぼんこ やよい なつき

毎日句会みのある選・二〇二二年四月二五日